2025年4月入学

慶應義塾大学大学院入学試験問題

法務研究科

法律科目試験

(商法・民事訴訟法・刑事訴訟法)

- 注 意
1. 指示があるまで開かないこと。
 2. この問題冊子は12頁ある。試験開始後ただちに落丁、乱丁等の有無を確認し、異常がある場合にはただちに監督者に申し出ること。
 3. 受験番号（2箇所）と氏名は、解答用紙（表）上のそれぞれ指定された箇所に必ず記入すること。
 4. 解答用紙の※を記した空欄内には何も書いてはならない。
 5. 解答は科目ごとに指定された解答用紙に書くこと。誤った解答用紙に解答した場合でも、解答用紙の交換や再交付の求めには応じない。
 6. 答案は横書きとし、解答用紙（表）の左上から、順次、実線内に一行ずつ書き進めること。
 7. 答案は、黒インクの万年筆またはボールペンで書くこと。
 8. この問題冊子の5、10～12頁は白紙である。下書きの必要があれば、この部分を利用すること。また、解答用紙を下書きに用いてはならない。
 9. 注意に従わずに書かれた答案、乱雑に書かれた答案、解答者の特定が可能な答案はこれを無効とすることがある。

商 法

〔問 題〕

次の【事実】を読んで、〔設問〕に答えなさい。

【事実】

1. 甲株式会社（以下「甲社」という。）は、広告業を営む会社であるが、最近では生成 AI の開発にも積極的に取り組んでいる。甲社は、非上場会社であるが公開会社であり、取締役会及び監査役を設置している。
2. 甲社の発行可能株式総数は 100 株であり、発行済株式総数は 50 株である。そして、甲社の株主構成としては、甲社の創業時から、創業者である A が 20 株、A の妻 B が 20 株、A と B の子である長男 C 及び次男 D が 5 株ずつをそれぞれ有している。
3. 甲社の取締役会は、取締役 A、C、D、長年に亘って A を支えてきた E、及び、AI の研究者であり D とも付き合いのある F の 5 名で構成されており、代表取締役は A である。甲社の監査役は A の旧友で税理士資格を有する G である。なお、B は甲社の取締役にも監査役にも就任していない。
4. D は、K 大学理工学部の博士課程を修了後、アメリカの大手 IT 企業で AI の開発に関与していたが、A から強く頼まれたこともあり、令和 2 年から甲社の取締役に就任し、今では甲社における生成 AI の開発責任者となっている。
5. D としては、甲社における生成 AI の開発をさらに加速させたかったものの、D よりも前から甲社の取締役に就任している C が、D への僻みもあり、何かにつけて、D の提案を拒否していた。A としては、今後、甲社をさらに成長させるためには、D が主導して甲社を経営するしかないと考えている。
6. A と D は、相談の上、生成 AI の開発責任者である D が甲社の経営を支配するために、甲社が D に対して、以下のとおり、募集株式を新たに発行する（以下「本件新株発行」という。）ことを計画した。
 - ① 25 株の新株を D に発行する
 - ② 払込期日は令和 6 年 3 月 27 日
 - ③ 1 株当たりの払込金額は 20 万円なお、令和 6 年 3 月当時における甲社の株式の評価額は、どのような算出方法によっても、1 株当たり 50 万円程度であった。

7. 令和6年3月4日、適法に招集、開催された甲社の取締役会において、Cは本件新株発行に反対したものの、A、E及びFが本件新株発行に賛成したので（Dは、本件新株発行に関して特別利害関係を有するので、議決には加わっていない。）、本件新株発行は承認された。なお、甲社は、上記取締役会決議の他に、本件新株発行に関する機関決定を行ってはいない。
8. そして、Aは、法定の期間内に、甲社の代表取締役として、本件新株発行に関する募集事項等について定款で定めた方法による公告を行った。

〔設問〕

Cは、令和6年3月21日の時点において、本件新株発行をやめさせたいと考えている。Cは、同日の時点において、どのようなことを理由に、甲社に対して本件新株発行をやめるよう請求することができるかについて論じなさい。

民事訴訟法

【事例】

X 1 および X 2（以下、「Xら」という。）が交差点を歩いて横断していたところ、Yの運転する自動車にはねられて、Xらが負傷した。そこで、Xらは、共同してYに対して不法行為に基づく損害賠償請求の訴えを提起した（以下、「本件訴訟」という。）。

【設問】

以下の各問について民事訴訟法上の観点から論じなさい。なお、問1と問2は相互に関連しない。

問1

第1回口頭弁論期日において、Yは、「Xらは事故当時に歩行者用信号が赤信号であるのに、それを無視して横断していた。」と陳述して、Xらにも過失があると主張した。これに対して、X1は、「事故当時は青信号であった。」と陳述した。他方、X2は、「事故当時は赤信号であった。」と陳述した（以下、「本件陳述」という。）。

本件陳述は、裁判所にとってどのような意味をもつか。また、本件陳述は、共同訴訟人であるX1にとって意味をもつか。

問2

X1は、入院治療費150万円、慰謝料50万円、介護費用300万円の3つの費目を合計した500万円の損害を被ったと考えているが、本件訴訟においては損害額全体500万円のうち入院治療費と慰謝料の2つの費目（合計200万円）を明示して請求していた。第1審裁判所は、入院治療費を150万円、慰謝料を50万円と認定して、Yに200万円の支払いを命じる請求認容判決をした。X1は、介護費用300万円を追加請求するために控訴することができるか。

刑事訴訟法

以下の【事例】を読み、後記【設問】に答えなさい。なお、Xの行為については、公務執行妨害罪が成立することを前提として論じること。

【事例】

1 H港管理事務所に勤務する県職員であるVは、令和5年9月1日午後4時頃から、H市みなと1丁目所在の臨海公園及び防波堤付近において、公用車（普通乗用自動車。車体の両側面に、「H港管理事務所」の文字が大きく書かれている。）に乗って、港湾施設管理運営のための調査業務に従事していた。

Vが、上記調査業務のため、同日午後5時30分頃、臨海公園の駐車場に止めた同車の運転席に座り、全開にした窓から、デジタルカメラで港湾施設の写真を撮影していたところ、同車から少し離れた場所にいた、長袖シャツを着用した中年の男性Xが、「何を撮影しているんだ。」と声をかけてきた。自分の姿を無断で撮影されたと思って腹を立てていたXは、Vが、「H港の管理事務所の者です。あなたの写真は撮っていませんよ。」と説明したのに対し、大声で、「嘘をつくな。」「データを消せ。」などと言いながら、同車の方に近づいてきた。

Vは、手元のパワーウィンドウのスイッチを急ぎ操作して運転席側の窓を閉めようとしたが間に合わなかったことから、Xは、運転席側の窓の隙間から車内に右腕を深く差し入れてきて、大声を上げながら、Vが着用していたネクタイの結び目近くをワイシャツともども鷲づかみにして、何度も身体を前後に強く揺さぶるなどの暴行を加えた。

XがVの着衣から手を離れた際に、Vはすぐに携帯電話を取り出して110番通報を行った。これを受けて現場に臨場した司法警察員Kは、Xについて、Vから通報のあった公務執行妨害被疑事件の犯人と認めて、同日午後5時45分、現行犯人として逮捕した。

2 本件捜査を担当する司法警察員Lらは、令和5年9月2日午後5時20分頃、Vの立会を得て、臨海公園の駐車場において実況見分を実施した。

司法警察員Lは、上記実況見分の結果につき、【別紙1】及び【別紙2】を添付した、後掲の実況見分調書を作成した（なお、同調書については、写真も含め、記載を省略した箇所がある。）。

3 検察官Pは、所要の捜査を遂げた後、Xを上記公務執行妨害の事実で起訴した。

第1回公判期日における罪状認否の際、被告人Xは犯行を否認し、同人の弁護人Dは、「XはVの乗っていた車内に腕を差し入れていないし、仮に腕を差し入れていたとしても、身長が約155センチメートルで小柄なXは、Vの着衣に手が届かない。」と主張し、事実を全面的に争う趣旨の陳述をした。

証拠調べの手続に入り、冒頭陳述の後、検察官Pが、司法警察員L作成に係る上記実況見分調書につき、「本件犯行が可能であったこと」という立証趣旨で取調べ請求をしたところ、弁護人Dは証拠とすることには不同意であると述べた。なお、検察官Pは、本件被害状況については、Vの証人尋問によって立証する予定である。

【設問】

以下の問いすべてに答えなさい。なお、問いの順序に従い、かつ、問いの番号を明記して解答しなさい。

- 1 伝聞証拠（刑事訴訟法320条1項）の意義について簡潔に論じなさい。

- 2 実況見分調書は、刑事訴訟法321条3項の「司法警察職員の検証の結果を記載した書面」に含まれるか、論じなさい。

- 3 上記問い1及び2に対する解答を前提として、【別紙1】及び【別紙2】が添付された、後掲の実況見分調書の証拠能力について論じなさい。

実況見分調書

令和5年9月3日

H県H中央警察署

司法警察員警部補 L ㊟

被疑者Xに対する公務執行妨害被疑事件につき、本職は、下記のとおり実況見分をした。

記

1 実況見分の日時

令和5年9月2日 午後5時20分頃から同日午後6時15分頃までの間

2 実況見分の場所、身体又は物

H市みなと1丁目 臨海公園駐車場

3 実況見分の目的

被害再現状況を明らかにし、証拠を保全するため。

4 実況見分の立会人（住所、職業、氏名、年齢）

H市I町5丁目10番25号 被害者 H港管理事務所職員 V（当時28歳）

5 実況見分の経過

見分状況は、別紙1及び2に記載のとおりである。

見分に当たっては、Vが被害当時乗車していた車両を用いた（座席の前後の位置、高さ、背もたれの角度は被害当時と同じである。）。

被疑者Xの役は、H中央警察署 司法巡査 M（身長、腕の長さや太さなど体格がXと同じで、長袖シャツを着用）が務め、立会人（被害当時と同じ寸法のネクタイ、ワイシャツを着用）の指示説明によって、立会人が上記車両に乗車していた状況等を再現する形式で行った。

6 実況見分の結果

【別紙1】【別紙2】のとおり。

7 天候

本実況見分中は晴天であった。日没前で周囲は明るかった。

以上

【別紙 1】

車両の運転席側の窓の隙間の上下幅を測定している写真

(窓の隙間にメジャーを当てて上下幅を測定し、目盛りが約 15 センチメートルを示している様子が写っている。約 50 センチメートル離れた場所から撮影したもの)

当職が、立会人（V）に対し、犯人が車両の窓から腕を差し入れてきたときの、窓の隙間の上下幅を示すよう求めると、立会人は、運転席側座席のパワーウィンドウのスイッチを操作してドアガラスの位置を調整し、「これくらいでした。」と示したので、その隙間の上下幅をメジャーで測定したところ、約 15 センチメートルであった。

【別紙 2】

V と M 巡査が被害状況を再現した写真

(M 巡査が、車両の運転席側の窓の隙間から右腕を差し入れて、運転席に座っている V の着用していたネクタイの結び目近くをワイシャツともども鷲づかみにして前方に引っ張っている様子が写っている。約 1 メートル離れた場所から撮影したもの)

立会人（V）は、「犯人は、運転席側の窓の、上下に開いた約 15 センチメートルの隙間から右腕を差し入れて、運転席に座っていた私が着用していたネクタイの結び目近くをワイシャツともども鷲づかみにして前方に強く引っ張った。」と説明した。